韓国の地域経営型グリーン・ツーリズムにおける先進事例分析

旭川大学　近藤功庸

イメージマーケティング研究所　宋柱昌

北海道大学　山本康貴

韓国では2002年に農林省が農村に賦存する観光資源を有効に活用しつつ，地域全体の活性化を図る目的で緑色体験マウル事業を開始し，マウル（集落）単位による地域経営型グリーン・ツーリズムが導入された．また2002年ころから韓国でも週休２日制の導入が拡がり，余暇時間の増加を背景として，グリーン・ツーリズムの展開に注目が集まっている．

韓国グリーン・ツーリズムを対象とした研究は，わが国でも見られ，特に浦出・宮崎(2005)は韓国グリーン・ツーリズムの展開において，次の２点について問題提起をしている．第一に，既存の村（マウル）組織を活用して運営される韓国グリーン・ツーリズムは，リーダーへの依存度が高いものとなっている点である．第二に，体験プログラムなどのソフト面において，いまだ地域固有性が発揮されておらず，差別化がなされていない点である．

そこで，本稿では，韓国の地域経営型グリーン・ツーリズムにおける２つの先進事例（Aマウルと Bマウル）を分析して，浦出・宮崎(2005)で問題提起された上記の２つの論点について考察した．主な分析結果は，以下である．

Aマウルは，観光資源として，けやきの森，洞窟，渓流など豊かな自然に恵まれていた．このような資源を活かし，多様な体験プログラムを実施していた．マウル独自の住民自治規約も制定し，村の景観維持にも努めていた．また，マウルの代表（リーダー）は2008年から里長の兼務を辞め，グリーン・ツーリズム活動に専従する態勢をとるようになった．以上の結果として，Aマウルでは，訪問客が年々増加しているものと推察された．

Bマウルの観光資源は，環境保全型農業の実践による品質の高い農産物の生産などに加え，陶芸家や民族音楽家（いずれも他地域からの移住者）の存在である．このような資源を活かし，農産物の収穫体験などに加え，陶器作り体験や民族音楽体験などの特色ある文化的体験プログラムも実施していた．また，マウルの総務（実質的なリーダー）は，里長を兼務しておらず，グリーン・ツーリズム活動に専従していた．以上の結果として，Bマウルでは，訪問客が年々増加しているものと推察された．